



宇宙の謎 65の発見物語

ポール・マーディン 著／富永 星 訳

岩波書店 定価4,800円+税 340頁

読み物
お薦め度
4
☆☆☆☆★

なんとも興味をそそられるタイトルである。誰しもが一つや二つ、宇宙に関する謎を心にもっていた（いる）のではないだろうか？ 月はどうして満ち欠けをするのか、季節によって見える星座が異なるのはなぜなのか？ 宇宙に果てはあるのか？ はたまた宇宙人はいるのか？ こういった謎がどうやって解き明かされてきたのか。そもそも宇宙の謎はいかにして発見されたのか。それぞれの発見やその謎解きには人々の長きにわたる観察や思考の積み重ねがあったり、あるいはある天才科学者の一瞬のひらめきによってもたらされたりといった物語があり、それは往々にしてその発見以上に魅力的である。いわゆる科学の発明・発見の偉人伝を読んでその発見へ至るまでの物語に感銘を受けた経験をもつ人も多いのではないだろうか。

この本は天文学の歴史における重要な発見にまつわる記録集である。星座とそれにまつわる神話という形で現在まで引き継がれている恒星の年周運動の発見や、惑星や彗星の運動の発見といった紀元前のものから、銀河系中心のブラックホールや膨張宇宙といった最近の発見までも網羅した61もの項目、それに加えて「ダークマター」、「ダークエネルギー」、「重力波」、「地球外生命」というこれから発見・謎解きが期待される四つの項目からなる。宇宙科学史上の重要な発見のかなりの部分は網羅されており、この一冊で天文・宇宙科学の発展の歴史を俯瞰することができる。

ただし、話題が多い分それぞれの項目は4-6ページほどで、しかも図版がそのスペースの半分ほどを占めるのでそれぞれの発見物語はあまり深くは語られていない。「発見物語」というタイトルから伝記的なものを期待する読者には肩すかしかもしれない。また各項目の科学的背景やその科学的意義も詳しくは記述されておらず、この本を科学辞典や入門書的に利用することも難しい。むしろこの本の特筆すべき点は図版の豊富さである。各項目につき5-10枚もの図版があり天体の美しい写真はもちろん、コペルニクスの宇宙像、ラッセルの手書きのHR図、ハーシェルが描いた星雲といった歴史的な図も多く含まれている。しかも全ページカラー印刷である、読み物というよりは天文図鑑ととらえたほうが適切だと思われる。

科学に興味のある少年少女にお勧めしたい一冊である。宇宙では地球上では想像もつかないような現象が起きていること、人類がその現象をいかにして発見して、さらには科学的に理解してきたのか。こういった人類が積み重ねてきた宇宙の謎解きの歴史を美しい図版とともに解説し、さらには科学の醍醐味を感じさせてくれる本である。もちろん過去に少年少女であった人にもお勧めである。この本は科学がわくわくする面白い挑戦であるということを思い出させてくれるであろう。

浜名 崇（国立天文台理論研究部）